

## 30 歳になりました

第 3 期 OB 横山 嵩

昨年 30 歳になりました。30 歳というと人生の節目だとかよく言われますが、全く自覚がなく、あっという間の 1 年間だったような気がします。

昨年は中々時間が取れず、ゼミへ顔を出すのが少なくなってしまったのが残念ではありましたが、ホームページでの活動報告やアップされている論文などを拝見するに、例年以上の研究活動を展開しているように見えますし、また相変わらず個性の強いゼミ生が集っているようで、そんな状況を OB としては嬉しく思っています（指導する先生は相変わらず大変でしょうが）。

前回の寄稿にも書かせていただきましたが、昨年は会社の新規事業として「東急ベル」という総合宅配サービスの立ち上げを行いました。サービス内容としてはネットスーパーなどの生鮮食品・日用品からデ



本年度前期納会@恵比寿ビアガーデン  
(著者は右)



担当営業所のスタッフたちと。  
(著者は後列右端)

パ地下のお惣菜・専門店商品などの宅配の他、ハウスクリーニングや住まいの相談事、高齢者への定期訪問サービスまで幅広く「ご訪問する」ことを軸にして展開しています。我々自身では勝手に「ホーム・コンビニエンスサービス」などと称しておりますが、要は自宅に居ながらにして様々な商材、サービスの提供が受けられる仕組みを作ろうとしているわけです。今やネットで何でも手に入れられる時代ですが、我々は敢えて佐川やヤマトに配送を委託するのではなく、我々自身のスタッフが訪問し顔を付き合わせたコミュニケーションの中で、その人が本当に必要としている物やサービスを見極め、それを提供していくことを目指しています。御用聞き、コンシェルジュなど言い方は色々あるかもしれませんが、訪問時における消費者一人一人とのコミュニケーションの中から、どれ程の商売に繋げていけるのか、今は試行錯誤の繰り返しが続いています。

一昨年の5月には自分と課長の2名から始まったこの事業ですが、昨年10月末の開業時では関係者は200名を越え、当時は中々感慨深いものがありました。ECサイトの製作、物流システムからコールセンターの構築まで含めたゼロから小売が実際に機能するまでの事業構築は想像以上に範囲が広く、障壁も大きかったものの、周りの協力も得ながら何とかスタートまで漕ぎ着けられたなというのが正直な感触です。しかしながら、事業としてはまだまだ目指す姿には遠く、今年も引き続き全力で走りながら更なる構築を進めていく決意をしております。

今は、スタート直後ということもあり、現場の営業所の1つに勤務し、運行管理者をやっています。配送業務を管理するだけでなく、日々スタッフが吸い上げてくるお客様からの声に触れたり、場合によっては一緒にお客様へ訪問したりしていますが（クレーム処理などもあります）、それらの声を踏まえた次の展開戦略も本部と連携して検討しています。

一方、プライベートでは昨年も引き続きアメリカンフットボールの社会人リーグでプレーしたり、ジャズのバンドのライブをやったりしていましたが、それ以外では新たに慶應義塾幼稚舎（小学校）の水泳学校のボランティアコーチを務めさせていただくという事がありました。自分は幼稚舎出身ではないので厳密にはOBではないのですが、以前まで慶應義塾普通部（中学校）の水泳学校のコーチをやっていた経験を生かして、とお声がけいただいたのがきっかけでした。普通部の水泳学校は数年前に行事が終了してしまっており、コーチとしてはblankがあったため若干不安な部分はあったものの、せっかくの機会なのでコーチを受けさせていただきました。今までは中学生（男子）が相手でしたが、今度は小学校6年生（男女）ということで、どれほどの差があるのか正直分かりませんでした。この世代での年齢1歳の差は思った以上に大きかったです。あと、どちらかというとな性的の方が体力含め強いのかなという印象を持ちました（気も強かったかも…）。そのような事情もあり、海での指導中は水温による体力の損耗等にも十分留意しながら指導を進め、全員を目標である3キロの遠泳に完泳させることができました。遠泳を完泳したときの生徒の達成感溢れる笑顔は今でも脳裏に焼きついています。

生徒と同じ宿（隣の部屋）で寝泊りし3食を共にしながら（自分含めコーチ陣の食べっぷりには生徒は驚愕していましたが…）1班9名を率いての4日間はとても充実した日々であり、短い時間の中で可能な



生徒への指導風景。  
(著者は写真中央)

限り色々なことを伝えられたかと思います。伝えるといっても、ただ泳ぎの技術だけでなく、潮の流れや海の生き物、自然との向き合い方の話があったり、全く泳ぎに関係ないお互いの馬鹿話自慢をしたり、誰が誰のことを好きだ何とかという話だったり、他にも友達感覚で色々な話をしましたが、一番意外だったのはこれからの中、高、大学生の生活がどうなっていくのかなんて質問された事でしょうか（考えてみれば確かに、兄弟でもない限り誰に聞いても答えてくれない質問なのでしょう）。勢い余って大学ではマーケティングを勉強するといいいよ、なんて言ってしまいましたので、もしかすると生徒の中から未来の小野ゼミ生が出るかもしれません（笑）。

実に年の差18歳という、うっかりすると親子くらいの関係でしたが、会ってすぐに打ち解けることができた訳は、決して自分の精神年齢が低い訳ではなく（そうでないと信じたいです）、彼等に対して「指導者、先生」ではなく「先輩」としてのスタンスを取り続けた事だったのではと思います。

自分が思うに、慶應義塾において、この「先輩・後輩」という関係は他の集団の同じものよりちょっと大事な関係です。義塾の後輩を先輩が損得無しで指導・手助けするのは当然であり、後輩も遠慮なくその助けを受け、それをさらにまたより下の後輩へ受け継いでいく、このサイクルが昔から伝統的に特に強い集団が慶應義塾であり、このつながりが今の世の中における塾の力になっている気がしてなりません（その象徴が各所に存在する三田会と呼ばれる組織です）。自分は中学から塾にお世話になっているので特にその思いが強いかもしれませんが、中学の水泳部、高校のアメフト部共にコーチは先輩の大学生や社会人

の OB でしたし、今回のボランティアコーチの話もまさにこれにあたり、先輩が後輩を指導する、という義塾の伝統に沿った考え方から出てきた依頼だったと思っています。

そして、この伝統はゼミにもあてはめることができるはずで、大学院生や 4 年生が 3 年生を指導するという狭い範囲の先輩後輩の関係だけでなく、社会人となった OBOG も後輩 OBOG や現役学生に対してそれぞれができる範囲（たまに現役の飲み会に顔を出す、程度でも構わないのです）で何かやれることを探し、実行する意識を持ってもらえたら嬉しい限りです。つまり、皆さんのゼミへの帰属意識をほんの少し高めてもらっただけでいいのかもしれませんが。この世の小野ゼミ生は既に 200 人を超えてきており、皆で連携すればその力たるやその辺の輩の及ぶところではないと思いますし、その効果は結果として卒業生にも還ってくるものであると確信しています。

ま、という訳で今年もたまには顔を出せればと思っていますので、先生ならびに現役の皆様、OBOG の皆様、今年もどうぞ宜しくお願いいたします。



受け持った班の生徒と先生方、OBOG コーチ陣と。  
(著者は写真中央)